

# 葛洪の儒家及び道家思想の系列とその系譜的意義について

石 島 快 隆

## 一 葛洪の傳記について

葛洪が、その著述で述べている考は、彼の生涯を通じて、彼自らによって實踐されている。従つて彼の傳記を見ること、その思想の体系を見る上に、不可欠の條件となつて來る彼の傳記は、自叙と晋書卷七十三列傳第四十二に載せられてゐる。然もそれは陶淵明などの如く隱逸傳に於てではない、洪は稚川、丹陽句容の人。父祖は呉に仕え、晋の南下を防字いだ。父の悌は、呉の滅亡後、晋に入り邵陵の太守となつてゐる。彼は第二子で、十三才の時に父を失つた。自耕自作貧しい生活を續けながら、刻苦勉強した。戦亂により、遺された家藏の書も失つてしまつたので、昼は働いて紙筆を求め、夜は書を寫して誦習した。十六才にして、孝經、論語、詩、易を讀んだ。こゝに是等の四書の特記して居る所から見ると、孝經と論語とは彼の儒家的倫理思想を養い、易は彼の哲學的思想を養つた萌芽であることを示すものであろうか。彼は哲

學的思想上、易の外に老子を重んじてゐるが、謙退の道として兩者相通するものである。二十才の頃までは、雜文を作ることをしていた。その後は、これを廢したというが、この間の作品などを集め合わせて碑頌詩賦一〇〇卷が出来たものでもあろうか。爾來、子書を作ることを志したが、十年程、兵亂のために中止した。晋の統一という國家多事に當り、不本意ながら、大安中に石冰の亂を平定することに與り、伏波將軍となつた。これは恐らく前記の年譜から推すと三十才前後の事であらう。泰安は、西紀三〇二年と三年との二ヶ年だけである。彼の才學は、この間にも、軍書、檄移、章表、箋記三〇卷の内容に當るものを殘したものであるか。彼は功賞を論ぜず、洛陽に至り異書を搜し求めて、その學を廣めようと思つたが、天下の亂れた有様を見て、南方に身を避けようとした。そこで廣州の刺史稽君道の幕下となつて、廣東へ赴くことにした。然し稽が害されるに及んで、遂に多年南土に停まつた。建武中に内外篇が出来たというから、彼の代表的

著述である抱朴子の成立したのは、この間の事であろう。本傳には、大凡内外百一十六篇とあるが、現存の七十篇の目録と合わない。建武は一年で終り、愍帝が劉聰に殺されて西晋が滅びた西紀三一七年である。泰安より一五五程あり、洪が三十歳より四十五歳頃に至る時期と推定されるようであるその間、官途につくことを一切避けたというから、著述に専念していたものであろう。その後、又郷里に歸り、禮辟されても皆赴かなかつた。五經、七史、百家言、兵事、方伎、短雜、奇要三一〇卷、神山傳十卷、隱逸傳十卷などは、固より内外篇著述の廣義に於ける資料的副産物であろうが、猶おこの間に續いて整理されたものでなからうか。自叙に載せているから、建武以前に原型は成立した譯ではあるが學究生活の空白を感ずる。尤も元帝から爵關内侯を賜わるに至り、この頃、もう一度彼は官途についている。咸和の初め頃幾轉して諮議參軍に遷つたとある。咸和は九年あり、西紀三二二六から三三四年の間で、恐らく洪が五十四歳から六十二歳頃の事かと、上來の計算からすると推定されるようである。時に干寶が洪と深く相親友し、洪を薦めて、散騎常侍領大著作となし、国史編纂に當らせようとした。然し洪は、年老いたれば煉丹して遐寿を祈りたいとなし、固辭して就かなかつた。そこで交趾に丹を出すと聞いて、句漏の令となつた。帝は洪の高き資質を惜しんで許さなかつたが、榮達のためではなく、

丹を求めためであるからとして、強いて求めたので帝も之に従つた。洪は子姪を將いて俱にゆき廣州に至つたが、刺史鄧嶽に留められて交趾にゆくことが出來ず、羅浮山に止まつて煉丹した。山に在ること積年、著述も輟めなかつたとあるから、自叙に記載なく、本傳にある金匱藥方一百卷や肘後要急方四卷など、煉養に關係深い著書が、この間に作られたものであろうか。八十一歳で羅浮山に於て兀然として睡るが如く卒した。人々は尸解仙となしたという。自叙では嵩岳で服食養生しようと思つたとあるが、如何なる次第か實現してはいないようである。彼が自ら叙べている人柄は、貧賤に屈せず勉學し、娛樂趣味で實用にならぬもの一切を顧みず、學問も正經、諸史、百家の言、短文、雜文、萬卷を見るにつとめ、緯書にも意を動かされて好んで讀んだが、遁甲など修養に無益なものを廢したとあるから、極めて謹直な風格であつたとが知られる。彼が年老いてから交趾に赴いて、平素信じている煉丹の功を實現しようとした忠實な熱意からすれば、若い頃に數千里を遠しとせず必得を期して、書を尋ね義を問ひ、遂に典籍を究覽したと本傳に記されているのも事實であろう。然も性來寡欲であつて、名利のために艱苦に堪えて居るのでなく、全く道を求める一筋に傍目もふらぬ精進を續けた生涯であつたのである。これを自ら誇るでもなく、自分は、正經傳授の純儒でなく、儒者のはしくれに過ぎないと謙

退し、雜學を以て自任しているのである。彼の儒學は、無師獨悟であつて、干寶の如きも彼の求める思想家ではない。その儒家に於ける師友は、結局、先賢の典籍以外に求め得なかつたものであろう。

道家に於ては、その身近によい指導者があつた。彼が神仙の學得には、必ず明師を得ねばならぬとしているのも所以なしとしない。彼の從祖の葛玄は、呉の時代、道を學んで仙を得、葛仙公というた人で、その煉丹の秘術を弟子の鄭隱に授けた。即ち洪は隱について學び、悉くその法を得た。その後又鮑玄に師事した。洪は彼の女を妻とし、その業を傳え、兼ねて醫術を綜練した。この葛玄・鄭隱と鮑玄との師授によつて、彼の道家思想が構成された所に、道家に於ては、他に譲らない強い傳統的確信をもつ所がある。かような關係にある洪の儒家と道家との二つの思想は、内的に如何なる意図や構想上に系列せられているか、又外的に如何なる思想史的地位に系譜づけられているであろうか。この点を少しく明かにしようとするのが本稿の目的である。

## 二 葛洪の儒家思想の系列

洪の本傳によると、駁難通釋するものを外篇というとして記している。これは自叙に於て、外篇を人間の得失・世事の感否をいうて儒家に屬すと述べている方が具体的に説明している。

葛洪の儒家及び道家思想の系列とその系譜的意義について

そこで五十篇の中、自叙第五十を除いて、他の四十九篇を見ると、現在本の配列のまゝで考えても、この二部に分けることが出来るようである。いま假に行品第二十二までを境として前後二部に分けた上で、更に便宜上内容から幾つかに分類して、彼の儒家思想の系列を立てて見ようと思ふ。

(一)人間の得失について——特に官僚としての人間について駁難通釋する。

(1)士人の得失——讀書人の教學。

(イ)嘉遯第一。人間は所長によって所短を全うすべきである。

自分に不向な仕官をして失敗するよりも、野に退いて著述するがよろしい。後生を切磋し道を弘め正を養えば、朝に立つて功をなすものと殊塗同歸である。眞を全うする人間ならば、無用の民ではない。

(ロ)逸民第二。在朝者は、力を陳べて庶事を乗り、山林者は、徳を修めて貧濁を厲ますもので、殊塗同歸、俱に人臣である。退讓して儒墨の道を替えぬ超俗者にも、政教的意義がある。

(ハ)助學第三。聖賢は學問を樂しみ、自ら孜孜として勵むことをしている。學者の意義は、進んで國を為むべく、又退いて身を保つにある。仕と不仕とに關係しない。然るに學問と仕官との本末を逆にする人間が多い。

(ニ)崇教第四。學問は、刑獄の法の卑近なものや、老莊の不急

の道ですて、六經の正道に精通し、儒術を競尚し、藝文を擲節すべきである。心を細務に肆にする者は、儒道の弘遠を覺らぬ人間である。

(2) 君王の得失——君王の明德修己。

(イ) 君道第五。人に君たる者は、人に先ちて己の身を修め、公平な王道を施き、宇宙が万物を籠めているような包容性のある人間でなければならぬ。

(ロ) 臣節第六。君は臣下の能を量って官職を授け得る人間でなければならぬ。臣下は己の才を量って之を受けよ。己の才を量らぬ人間は禍をうける。

(ハ) 良規第七。攝位の君人には、形だけ似せた偽君子がある。

周公の權道を良規とするも、王莽の如き偽りの人間があるから注意を要する。

(ニ) 時難第八。賢臣の言は、聖君にも容れられ難いものである。況んや忠言を容れない庸君に對して、賢臣の身の安否は難かしい。現實の君主には、賢臣を用いられない凡庸の人間が多い。

(ホ) 官理第九。闇世小器の君は、智士をうけ入れられない。良い御者は、勞せずして駿馬を千里に致すものである。賢君は居ながらにして賢臣を致して政を理めるものである。

(3) 官人の得失——官吏の良能と經律。

(イ) 務正第十。長所を用い短所をすてれば、人材を活かして功

をたてること出来る。雑多な官界に於ける官吏は、長所によって正しく任務を與えられたものであることが宜しい。

(ロ) 貴賢第十一。國家を亡ぼすのは、士を失うによる。聖賢の道を体得した大器を貴ばねばならぬ。

(ハ) 任能第十二。政務は、能吏を選んで任せねば功があがらない。事務の才能ある人間が必要である。

(ニ) 欽士第十三。能力のあるもの必ずしも良吏ではない。官吏には良い性質の人間を必要とする。

(ホ) 用刑第十四。俗儒は、たゞ周が仁を以て興り、秦が嚴を以て亡びたと聞いて、仁のみで得ず、嚴のみで失うものでないことを知らぬ。故に現實の政治は、刑徳併せたものでなければならぬ。官吏は、之に應じ得る才を必要とする。

(ハ) 審學第十五。官吏任用の試験には、經學と律令を審査するのがよい。さすれば徳刑併せた政治を行い得る人間が選び出せる。

(4) 人望の得失——人間の名實を一致。

(イ) 交際第十六。天地も國家社會も、交際によつて各全きを成している。良友と交際するのは、人間社會に於ける輔仁の道である。當代交友の道を誤るが故に、上に良友なく無黨となる。非類は遠ざかるものである。従つて退士が却つて良い人間であることにもなる。

(ロ) 備闕第十七。所短を以て所長を棄つれば、細禮を顧みない

匠世濟民の大人物を失うことになる。逸儕の才士は、小節に拘らぬ人間である。

(イ)擢才第十八。時勢の變化により、同じ物でも評價が異なるに至る。今や山林の儒を不肖としているが、英逸の才は、淺短の識る所ではない。賢を愚となすものは、また愚を賢とする。閭俗の罪人は、聖世の良い人間である。

(ニ)任命第十九。君子は、その時に非ざれば見われず、その君に非ざれば事えず、窮達も値う所に任せ、出處にも繋がるゝ所がない。即ち立言と國勲とを殊塗同歸となし、命を識るものである。

(ホ)名實第二十。大賢の状は至拙で、その味は甚だ淡であるが、勢利に屈せず、耳目では解らぬ人間である。良才は、世に容れられなくとも、天を楽しみ命を識るから憂慮しない。當今、名は實に準せず、賈は物に基づかず、賢愚を顛倒してしまつた。

(ヘ)清鑒第二十一。人を見分けることは、耳目の經過する外見だけでは、精を盡して知り難い。名将でも田間から出た人間があり、宰相でも經誥を學ばない人間があつて、清鑒を要する。

(ト)行品第二十二。人物を見分ける標準として三種の人間を區別する。即ち善人三十九品、悪人四十五品、善悪にかゝらぬ下人とである。又、十條の眞偽不明の人間が居る。

(ニ)世事の感否——官僚支配社會の諸問題について駁難通釋。

(1)官僚治下庶事の感否——風俗制度。

(イ)弭訟第二十三。離婚訴訟が絶えない當今の風俗は、如何なる刑罰を以てしても止められない。輕々に諾して後に悔ゆる罪は、女氏方にある。言を食み信を棄て、與奪情に任ず所に、悪風の根源がある。その根源を正せば、訟が止まる。

(ロ)酒誡第二十四。酒は心身を害して一益がない。君子は徳を敗り、小人は罪をまねく。その風に染まると、教えても禁じても止まない。その害を如何に弁護しても、慎しむに如くはない。

(ハ)疾謬第二十五。當今、小利のために小道を学び、娛樂遊事を以て交際する風が多いが、道を以て交るべきである。

(ニ)譏惑第二十六。禮を棄てるのは、禍敗の階である。亂世が續き風教が頹れ、禮法が一定しないので、上國の風を何でもまねるものがある。江表桑梓の法を改めて、形式だけ上國にまねるのは、正しい禮を行う所以でない。

(ホ)刺矯第二十七。名門矯居して榮達し、謙虚の人窮居するような、門閥貴族主義は宜しくない。

(ヘ)百里第二十八。中央の大官が正しくとも、地方の小官が不正であれば、悪弊は叢り生ずる。故に地方の令長に宜しく才人を得べきことは台省の官よりも急務である。

(ト)接疏第二十九。英逸と大明、長才と深識とが相見えば、歴

試を待たずとも、審かに人物はわかる。細行を求めず大略を擧げて、疏賤と雖も明者を用うべきである。

(2) 官僚社会古今の感否——古今の禮教。

(1) 欽世第三十。古人の著書を尚んで、今を賤しむのは、必ずしも當らない。俗儒は、古書をば質朴でも天來の書とし、常人は、今文をば金玉と雖も瓦礫に同じとしてゐる。これは文運の進歩を無視する誤つた考である。

(1) 省煩第三十一。安上治民は、禮よりよきはない。然し繁煩に過ぎた形式的禮は、省略にすべきである。墨子の道も、行すべき理がある。五帝三王の禮樂を相襲がなくとも、安上治民を來すことは同一である。古事を變更すべからずとすれば、文明の進歩はなくなる。

(1) 尚博第三十二。正經は道義の淵海であり、子書は増進の川流であつて、二者は殊塗同歸である。漢魏以來、數多の子書があるが、當今それらは古書に及ばぬとされている。例えば、論語は重んずるが、太玄は軽んぜられてゐる。所聞を重んじ、所見を軽んずるのは誤である。

(2) 漢過第三十三。漢は道微にして俗弊れること甚しかつたが、その根源を尋ねると、人物を得なかつたことにある。例えば、老莊や左道に迷う不經の道を説く者が貴ばれ、正義の士が俗吏とされる類である。

(1) 吳失第三十四。吳の末期も人を失い、漢末と同様な病弊を

劇しく現わしてゐる。孔墨・孟軻・揚雄の道も、困否して行われぬ。吳の滅亡も、天より下すに非ず、賢者を去り不賢を用いたことにある。

(1) 守瘠第三十五。列子・曾參・孔子・孟子も、貧にありて利を求めない。友人潜居先生は、瘠土に居つて、藝文を勵み貧しかつたが、至徳を求めて豊沃を求めなかつた。瘠に處れば、清は學ばずして至るものである。清は福の集まる所であり、本を正す所以である。

(1) 安貧第三十六。三國鼎立の頃、樂天先生なるものがいた。經世の務も廢し、治生の事も忘れ、大變貧しかつた。先生の如き上徳は、六藝を富とし、德音を貴とするもので、下士の貧を憂えて利を争うが如きことをせぬものである。

(3) 官僚社会處世の感否——倫理文行。

(1) 仁明第三十七。明才なき暗仁は不可である。仁行は、明才により眞偽を分つ。易に大明終始とあるは、明先を教えたものである。

(1) 博喻第三十八。一篇九十六節。高山も積尋の功による。

困苦や忍苦は、成功大全の方途である。然し仁と忍とは、天地懸隔するもので、仁は人に、忍は己に用うれば善道となる。六藝・墳誥を以て講學精思して、天才は智を増し、卑人は君子と化する。

(1) 廣譬第三十九。一篇八十五節。志を堅くすれば善功を成す

墳典は進徳の具であり、聖經は弘濟する。徳は餘慶あり、功勲富貴の本である。正を守り道を履み、否滯を忘れる。守道の窮者は、非分の達者より強い。大勇は壮矛に非ず。潔飢するも穢飽を願わない。忠貞は亂世に貴ばれ、忠正は讒勝の世に排斥されるものだ。

(二) 辭義第四十。文は義理を主眼とする。兼ね通ずる事は難しいが、今人の弊は、文が煩冗で義理が不明となる傾向にある。

(ホ) 循本第四十一。君子の本は、徳行と文學とである。當今の弊は、本に循わず、末のみを追うにある。

(ハ) 応嘲第四十二。洪が仕官も社交もしないで居りながら、君道、臣節、譏俗、救生、用兵、戰守、審學、窮達をいうことを嘲うが、然し人の出處は、歸一するものであるから、位になくとも立言するに支障はない。

(ト) 喻蔽第四十三。著述は大なるを不可としない。毎論一貫して居れば宜しく、長大必ずしも蕪雜とすべきではない。淮南子や莊子が不純だとしても、その文をすつべきものでない。王充の論衡も、その博學な點を學ぶべきである。

(チ) 百家第四十四。百家は、正經をたすけるもので、博く學ぶべき必要がある。

(リ) 文行第四十五。文は末で行が本であるという考は誤である。所見を卑とし所行を貴とするのは宜しくない。

(ヌ) 正郭第四十六。游俠避亂の徒は、全隱の士ではない。郭の如きは、避亂の徒で隱士と稱すべき者でない。

(ヘ) 彈禰第四十七。禰の如き小人は、文筆の才を誤るもので、賢才仕途の道を得たものでない。

(ヲ) 詰鮑第四十八。老莊の道をはきちがいて、極端な遠古質朴をよいとするのは、無知から来る誤解である。儒家の礼法徳治を正とすべきである。老子の無爲も無君の世を意味しない。

(4) 士人處世の要道——謙退。

(イ) 知足第四十九。知足は人間處世上必然の道である。

(ロ) 君子は、道の通塞を憂い、身の窮達を憂いない。窮達——知足の人は之を問わず。

(ハ) 知者は言わず。一を守れば咎を免る。希聲は却つて大音である。重言——足ることを知る人は言わず。

### 三 葛洪の道家思想の系列

(一) 頭正門——道家の教理

(1) 神仙論——神仙の實體。

(イ) 暢玄第一。老子の玄を道の實體とする考に本づいて立論する。玄は萬物の本である。

(ロ) 論仙第二。仙人の實在を論證する。

(ハ) 對俗第三。成仙の學得すべき事を論ずる。

(2) 成仙論——養生の方法。

- (イ)金丹第四。成仙の勝法は、金丹を得て服するにある。
- (ロ)至理第五。仙道微妙の至理は、難知難説であるから、自ら校閲して、長生の可能なことを直覺すべきである。
- (ハ)微旨第六。世道の外なる仙道の微旨は、容易に不可解であるから、先ず小術を修めて漸進するがよい。
- (三)仙藥論——方藥、延年、鬼怪、變化、讓邪、却禍の諸法。
- (イ)雜應第十五。小法にも相当の功驗がある。
- (ロ)黃白第十六。明師鄭君所傳の黃白製法。
- (ハ)登涉第十七。製藥に當り心得べき入山の法。
- (ニ)真一第十八。製藥に當り心得べき分形法。
- (ホ)破邪門——世道と仙道との關係。
- (一)道儒同異論——本末關係上に兩立。
- (イ)塞難第七。人の命により、成仙には限界がある。故に成仙せずして、俗聖に止まるものがある譯である。然し兩者は、殊なる段階にありつゝも、矢張り兩立するといふべきである。
- (ロ)釋滯第八。道と儒は併せ行ふべきである。成仙の條件として、道德的善行を必要とする。世務を完了した者は、更に入道して仙を求むべきである。
- (ハ)道意第九。道家の道は、無名であつて、世道とは次元を異にする。
- (ニ)明本第十。道家が本であり、儒家は末である。
- (2)難成仙反駁論——成仙不能無根據。

- (イ)仙藥第十一。草木の仙藥は、延命の作用あるのみ。これによつて長生を求め得ないのは當然である。
- (ロ)弁問第十二。成仙せぬ俗聖があるのは、命によるのである。例外を以て全体を否定すべきではない。
- (ハ)極言第十三。成仙は學得すべきものである。假令、命ありと雖も、自然に長生するものではない。不學者の成仙せぬのは當然である。
- (ニ)勤求第十四。仙道は、明師を得て、而も勤求して學得すべきものである。然るに、明師は容易に得難く、又勤求する者も少いから、成仙者が稀な譯である。成仙は難業だが、不可能ではない。
- (三)流通門——學道の指針
- (イ)遐覽第十九。良い仙書の書目を記して、學仙の参考に供する。仙書は仲々理解し難いが、良書を求めて學ぶがよい。
- (ロ)祛惑第二十。良師と偽者とを弁別して、明師を求めて學得せねばならぬ。

#### 四 葛洪の儒家思想の系譜

論語を見ると、三仁・逸民を稱賛し、接輿・沮溺・丈人などを友とすべき意を述べたり、又賢者は世を避けるともいっている。小過を赦して賢才を擧げよと述べている。政は名を正すとある。君子は徳を懐い刑を懐う。徳を政の本とするが、



刑の末もすてないと説いている。人間を中人以上と中人以下として、下人を區別している。爲す所、由る所、安んずる所によつて人の善惡眞僞を判断するともある。訟を正しく裁くことより、訟無からしめんとも望んでゐる。酒は禮の用であるから禁じていけないけれども、亂に及ばずと誡めてゐる。禮も奢らんよりは、儉なれとしている。所聞を重んじて、所見を輕んずることはしない。文質の偏らない者を君子としてゐる。人と交際するには、敬を以てすと言ひ、道が同じくなければ、共に謀らないという。曾子も文を以て友を會し、友を以て仁を輔くと演述してゐる。人を愛するのが仁であり、人を知るのが知である。知者は水を楽しみ、仁者は山を楽しむ。知仁動靜一如であつて、明仁伴うべきものであらう。文は人を示し、文行に輕重はない。文は義理が主眼で、辭は達せんのみとある。人を以て言を廢せずともいう。士は道に志し、惡衣惡食を恥とし居食の安飽を求めない。君子は窮しても濫れない。道有れば仕え、道無ければ去る。位無きを憂えず、立つ所以を憂うる。道の行廢は命であり、窮達も命である。命を知らぬものは君子でない。士たるものは、學を好んで善道を死守するのみ。學べば祿其の中にもありともいう。君子は、己を修め本をつとめ、仕えずとも孝弟であれば、政を爲すものであるとも主張してゐる。言を慎しみ行を先とし、言に訥にして行に敏であり、言の躬行に速ばぬことを恥とする。木訥

は仁に近いと云つてゐる。かように見て來ると、上來、系列的に概觀した葛洪の儒家思想の根據は、論語に載せられた原始儒家思想に俟つことが頗る多大であることを知るであらう。葛洪は、聖言のみならず、漢魏諸子の書を輕んじてはならぬと主張してゐる。漢初、早くも孔子の語を擧げて説をなし、孔老を無爲の道によつて調和しようとしてゐる。漢の學者中、最も孔子に模倣した人は、揚雄である。彼は、法言を以て論語に模し、太玄を以て易に擬した。葛洪は、その儒家思想を組織するに當り、基本的には原始儒家に本づけ、更に漢魏諸子の説の所長を集めて之をたすけたものと思ふが、就中、揚雄から強く影響されてゐるようである。即ち揚雄を自説の中に幾度か引用して居り、又己述の如く太玄を輕んずることの謂われなきことを弁護してゐる。雄に解嘲ある如く、洪は應嘲・喻蔽の二篇を作つて、自己の述作に對する世の批判に解答してゐる。學問の傾向も、雄に類似した點が多い。雄は初め相如を尊敬し、文學を好んで創作に従つた。洪も初め詩文を好んで作つた。雄の方言は、詩賦創作の副産物と見られるが、洪も外篇中に、言語や文章に對する意見を細説しているものを殘してゐる。雄は後に經學に志して、子書を述作したが、洪も中年同じような轉向をしてゐる。雄は學說の根據を易に求めて太玄を作つたが、洪は老子に求めて暢玄一

篇を作っている。洪も易を屢々いうているが、漢易漸く廢れ老莊盛行の波に乗る江南に於て、特に黃老神仙を説く洪の道家思想の根拠を易にとる因縁はない。これは先に後漢の魏伯陽が、漢易によつて仙道の理を説いた環境的便宜とも異なる所以である。次に雄の法言に對比すべきものとしては、博喻・廣譬の二篇がある。この二者は、他篇に比べて特に長篇であつて、独立の一書とすることも出来る。彼の文章は、著述全部が駢文体の所謂今文であつて、敢てこの二篇のみについていふべきではないだろうが、論語の文章の簡單で時には解し難い點があるのに比すれば、このような表現に一層長所があると思ふを以て作つたものようである。その事は、彼が他篇で屢々述べている文章論によつて首肯せられる所である。抱朴子曰く、其の道を以てせざれば則ち富貴も居るに足らず。仁を違り義を舍つるは期頤と雖も吝むに足らず。是を以て卞随は石を負うて以て淵に投じ、仲由は甘心して以て刃に赴くというよふな、單純な論語の模倣もある。或は、浚世渫わざれば則ち泥濘滋積り、嘉穀耘せざれば則ち莠莠彌蔓る。學んで思わざれば則ち疑闕繁を實たし、講じて精ならざれば則ち長惑功を喪うというものも同巧異曲である。南威青琴は姣冶の極なり、而も必ず盛飾を俟ちて以て麗を増す。回賜游夏は天才雋朗なりと雖も、而も実に墳誥を須ちて以て智を廣むというよふな調子で學問を勧める文に接すると、洗練された知

識人的感覺が味われる。こゝで全体に互つて深入りすることは、當面の目的でないから暫らく避ける。たゞ二篇に流れている思潮だけ述べると、天命主義、英才主義、衆智主義、博采主義、刑德主義、謙退主義、無欲主義、天爵主義、超俗主義、希聲主義、非門閥主義、名實一致主義などが、容易に列擧出来る。絶倫の碩儒、孤高の逸才、至徳の高器、冠世の明智などという人物が理想像である。その至道は元一とか玄一といわれるから、又体现者を至人ともいつている。行品篇に於て、善人と悪人とを分類しているのは、善惡の徳目を分析したものと見られるが、下人を區別して、人間を三種に分けているらしいのは、揚雄の性三品説に通うものでなからうか。葛洪は、更に彼と年代の近い後漢の王充に対しても尊敬を拂つている。王充の博覽主義は洪も共鳴實踐している所であつて、論衡に對する弁護説も亦たこゝに由來する。王充は桓譚の新論に敬服しているが、葛洪も桓譚を重んじ、新論に於て神仙家を排斥している實例を逆用して、その僞者であつて明師でないことを引證している。王充は訓詁學をとらないが、洪も亦章句より文章は生れないという立場を主張している。洪は鄭玄を大儒として尊敬している。然し經師を純儒とし儒雅と見るとしても、儒雅に政略を加えなければ役に立たないという考が洪の本色である。即ち子書創作の立場こそ、孔孟先秦諸子、漢魏諸子に續く傳統であると信じているのであ

る。王充は、孔孟すら問刺しているのであるが、洪も亦た孔孟を偶像化することに反対している。充は儒道二家を批判しているが、洪も亦所聞を重んじ所見を輕んずることを非とし古典もさりながら漢魏の子書も省みよとなして、儒家の尚古主義をすて、莊子の浮誕をも非難してとらない。充は宿命論者であるが、洪も亦儒家に於ても道家に於ても命を以て解決している。天命の思想は、原始儒家以來の通念で、論語にも沢山見えているが、漢代次第に進展變化し、充に至つて極まつたもののである。洪の獨斷的に見ゆる宿命説も、充の感化が強いのでなからうか。洪はなお此の外多くの漢魏諸子の説を用いているが、煩を避けて省略した。洪が人を見る態度は、短をすてて長をとるにあつた。例えば、王莽に對しては非難するが、揚雄を稱賛するに憚らないという工合であるこれ洪が、思想家の乏しい當時に出でて、能く大をなした所以であらう。

## 五 葛洪の道家思想の系譜

葛洪のいう道家は、所謂神仙道家であつて、老莊の道家ではない。洪は黄老主義者であるから、思想上に於ける老莊や莊子そのものを排斥している。莊子の死生を超越したり、死生を一如と觀たりする思想は、洪の如く直接長生不死を求め思想とは、相容れないのが當然である。内篇の諸文に徴す

ると、洪の黄老神仙思想は、淮南門下の神仙道に依る所が多いように思われる。然らば、洪がかように神仙に歸處を求めているのは、彼が重んずる漢魏諸子が皆な迷信を排斥している態度に比して、頗る奇異に感じないだらうか。これが釋明には、洪の神仙道についての正信と迷信との區別意識を考慮せねばならぬ。即ち洪からすれば、正信の神仙道は、彼の傳統に於てのみ見出せるものといわざるを得ない。それは遠く淮南黄老神仙家に發し、近く彼の家學に傳つた道である。洪が桓譚の説を屢々引用しているのは、迷信排斥と異端排斥とに於て一致點を見出しているのである。勿論、洪の書中には三張を排斥しつゝ相通ずる行持や小術が述べられている面がある。然し窮極に於て根本の目的を異にしている點を見逃してはならぬ。彼が本文の隨處に引用している仙書や、遐覽篇に記載されたゞけの仙書を見ると、頗る迷信的のものに満ちている。甚だしきに至ると、洪は自ら遁甲などは無益であるから學ぶことを止めたというているが、内篇中に遁甲を重んじて細説している。これ等は、千數百年前のものであり、僞作の多い道教經典が、何等加筆されずして現在に傳つたとも考えられないから、迷信的分子を増入として削ることも出来るかも知れない。然し洪に於ては、邪信即ち神仙家の異端という角度が重要な論點になつていたのでなからうかと思われ。なお魏伯陽の如き、易と結合した神仙道家との關係が考

えられねばならぬ。漢易は、後漢の鄭玄によつて、經學の統一精神となりつゝあつたが、魏の王弼が易と老莊とを結合するに及んで、その立場を一變することになつた。洪の僚友の干寶は、鄭王二家を折中し、新に人事說易の一家を立てている。洪も易を重んじ屢々引用しているが、その思想体系の中心としては老子をとつている。これは思想的に正しい態度であつて、當時としては、魏伯陽の立場は已に古典化しているといわねばならぬ。後世宋學興るに及んで、伯陽の參同契が再認識されるのも、思想史變轉の結果である。伯陽は、易によつて神仙道家の哲理を説き、迷信的神仙道を批判したが、洪に於ては書目に彼の書名を載せるのみで、少しも説き及んでいないようである。これは洪の家學が神仙思想史上また異なる流にあつた事實にもよるであらう。最後に、洪の神仙道の意義について一瞥して見たい。洪の時代は、漢の訓詁學の化石化と、漢の諸子學の讖緯的迷信化とにより、經學の創造性を極端に喪失していたものである。揚雄は、新王室の權威に奉仕して、當時の頹廢無氣力化した學問思想に反抗すると共に、先秦諸子の創造性を模倣再興することにより、漢學の滅亡を回避しようとしたものようである。然るに不幸にして王莽の建てた權威は、彼に支柱とならずに失敗してしまつた。王充は、雄の覆轍を避けて、權威に奉仕する無意義をさとり、隱遁して自己の道の創造性の保持に努力した。彼は單

なる復古的模倣主義によるものではなく、古の聖賢をも批判して憚らないのである。然しかうした精神の革命的創造の果ては、却つて自己の魂の否定とならねばならなかつた。充の徹底した宿命觀は、終に生命の喪失となるに至つた。洪は、この點をば、養生可能の確信によつて、宿命を認めつゝもその限界を設定することにより、解放したものでなからうか。固より彼の生存した時代の國家は、幸か不幸か奉仕するに値しないものであつた。邦道なければ隠るゝ外はない。よい社會の再建は、未來へ豫約して、嘉遯中に述作した子書に托せば宜しい。今や現實のユトピアの實現を見なくとも、一應世務は果された。神仙の道に専念して、魂の解放を圖るに如くはない。世俗を超越して、神仙となることが、魂の解放の唯一の道である。洪は、終に自ら求めて南海に去り、八十一才を以て此の世をすてて尸解仙となつた。かように考えることは誤であらうか。洪の外篇に於ては、個人や社會についての幾多の頹廢した事實が批判されている。即ち、政治・官吏・名實・行品・訴訟・飲食・娛樂・禮法・著述・思想・文學・言語などと、あらゆる混亂が次々と述べられて來た。これ等の混亂を正して、一層よい社會を再建するには、自ら政治的權力者とならなければ、いつまでも之を單なるユトピアに止めて置く外はない。孔子のみが素王でないと洪は言うている。洪もこの意味で素王であらう。黃帝は、至治の世を實現して

登仙した所の道家の理想像である。老子は無爲の世を實現するに至らぬ道家的素王であろう。孔子は命によって素王に止まった。老子は終に黄帝の如く登仙した。洪の立場は、正に老子のそれと一致する。洪が儒家の道以上に、その本源にさかのぼつて道家の道を説き、孔老を調和しているのも理由がある。即ち洪の立場からすれば、儒家と道家とは、固より併行すべきではあるが、次元を異にするといわざるを得ない。道家の道は、人情に基づく儒家の世道と異なり、宇宙の道に通ずる道であつて、單なる個人と觀じていた人間を小宇宙に轉回させる底の道でなければならぬ。この宇宙的轉回の原理が、老子の無名の道即ち玄であつて、その具体化に於ける作用因となるものが金丹である。従つて洪は、老子の道と冥合する方法として、道家に神仙術を結合した譯である。黄帝と老子は、二者結合の媒体である。洪は争亂によつて破産した思想家である。彼は門閥主義を排斥している。經濟的價值即ち利を憎み、俗的生活を超越することに倫理的意義を立てようとした。然しこれとても破産者が、未だ榮達を捨てきれないで、窮境に強いて意義づけようとしているものではないか。窮者が達道を説く思想ほどあやしいものはない。應嘲一篇の起る所以は、何を意味するであろう。これが果して窮道者の境涯といえるであろうか。こゝに於て、眞に窮道に徹する超俗的神仙道家への轉移が起らざるを得ない。洪の生

存した地域は、南方吳の地方である。吳は元來蠻地であるから、傳統的文化的根がなかつた。當時北方は、蠻族が侵入し、傳統化されつゝ傳統を低俗化して行つていた。洪には家傳の神仙道が用意されていた。かような環境の下に於て、洪の神仙道家への轉移は極めて容易であり自然であつたであろう。洪は、文武を兼ねべきことを説いて居り、時には武將として自ら活動もしているが、武力革命による傳統の破壊を希望しないし、又従つて似而非なる偽化神になりすました教匪の頭目として、亂世を統一しようとも考えていない。洪のつた道は、神仙となつて個人的に超脱することにより、混亂した社會に或は少くとも俗的欲望に滿ちた世界に對して、永遠の魂の世界を掲げようとした所に不朽の意義がある。この意味に於て、洪の道家思想は、ひどく小乗的であり、又、數々の不純物が挾在しているとしても、なお高く評價されねばならない。洪の無名の道の玄と金丹長生の二路線は、老子の無爲自然の道と長生久視の思想に淵源を求め得るばかりでなく、莊子の逍遙遊の道と養生主の思想とに脉絡を見出し得るであろうが、洪が老莊或は莊子を排斥する場合と異なる角度に立つて論ずべきこというまでもない。

(昭和・三三・一二・八稿)